



OPRTプレスリリース

平成23年7月25日

IUCNがマグロをレッドリスト（絶滅危惧種）掲載 異議あり！

世界最大の自然保護機関であるIUCN（国際自然保護連合）は、7月7日、早急なマグロ類の保護対策が必要と発表した。絶滅危惧種をまとめたIUCNのレッドリストによると、マグロ類8種のうち5種が絶滅の危機に瀕しており、特にミナミマグロは、「深刻な絶滅の危機に瀕する種」、大西洋クロマグロは「絶滅の危機に瀕する種」、メバチマグロも「絶滅の脅威に晒されている種」としている。

マグロ類は、各地域に資源管理機関（RFMO）があり、所属の科学委員会が、資源状況を診断している。IUCNのレッドリストの警告は、果たして、科学的に適正なのか？

ICCAT（大西洋まぐろ類保存委員会）で長年、事務局次長を務め、現在も日本の遠洋水産研究所の客員研究員として、各RFMOの科学委員会に出席し、世界のマグロ資源の最新状況に詳しい三宅真博士に聞いた。

「IUCNがまた無謀な警告をした。

かねてからマグロ資源を片端から絶滅に瀕した種のレッドリストに入れてきたIUCNが、今回は大西洋のクロマグロをリストに入れた。過去を見ると、彼らはすでに、資源量はMSY(適正)水準以上にあり過剰漁獲もされていないと結論されている東太平洋のメバチやキハダさえ、絶滅の危険性があると決めつけ、ランクは多少低いけどレッドリストに入れている。

一体どうしてこんな非科学的なことがまかり通っているのでしょうか。それはメンバーの中に魚の資源がわかっている人が少なく、殆どが分類、生態などの学者さんで環境団体の影響を受けやすい環境にあること。更には決められている判定基準、すなわち初期資源に対する現在資源量の割合をただ機械的にあらゆる種に当てはめただけで判断するからである。地球上に100頭しかいない希少動物が50頭になったら、これは誰が考えても絶滅にひんしている。しかし初期資源が百万尾のマグロが50万尾に減れば、それは丁度適正水準（MSY）であろう。しかしIUCNにとって両者は同じように絶滅に瀕しているのである。

すでに多くのマグロ資源学者はIUCNを見限って、その結論には注意を払っていない。もしIUCNがこのような基準での判断を続けるなら、絶滅にひんするのはマグロではなくて、彼ら自身の権威や信頼度ではないだろうか。」

（問合せ先）

（社）責任あるまぐろ漁業推進機構（OPRT）

事務局長：田端 事業部長：人見

TEL：03-3568-6388

FAX：03-3568-6389